

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス (1875-1911)

弦楽四重奏曲 ハ短調 (チェピンスキス編)

弦楽四重奏曲 ハ短調は、チュルリョーニスが1901年、ライプツィヒ音楽院在学中にカール・ライネッケに師事しながら作曲した作品で、リトアニア音楽史上初の本格的な弦楽四重奏曲である。初演は同音楽院で行われた。作曲者自身は書簡の中で本作に厳しい自己評価を下しているが、明晰な構成、均衡の取れた書法、ロマン派的抒情性、そして牧歌的な民族的気配はすでに明確であり、初期作品ながら高い完成度を示している。終楽章は散逸しており、現存する三楽章によって演奏される(第1楽章の一部は復元されている)。

2020年、ヴァイオリニストのヴィルヘルムス・チェピンスキスが本作を弦楽合奏版に編曲した。原曲の構造を尊重しつつ声部を拡充し、テンポを抑制することで音楽の内的緊張を強調している。欠落した終楽章に代えて第1楽章の素材を回帰的に用い、全体として閉じた形式を与えている。

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス (1875-1911)

5つの前奏曲 (ゾンデツキス編)

《弦楽のための5つの前奏曲》は、チュルリョーニスのピアノおよびオルガン前奏曲を弦楽合奏用に編曲した作品である。収録曲は、《グラヴェ (小さな歌、VL199)》、《モデラート》《アンダンテ》(ト短調および変ロ長調のオルガン前奏曲)、《アレグレット (前奏曲、VL187)》、《レント (前奏曲、VL239)》である。内省的で凝縮された表現を特徴とする原曲は、弦の響きによって立体的な音響空間へと拡張される。編曲は、リトアニア室内管弦楽団の創設者であり長年芸術監督を務めた指揮者サウリュス・ゾンデツキスによる。

ヴィドマンタス・バルトゥリス (1954-2020)

《わたしはシューベルトが好き》 (弦楽オーケストラのための)

【独奏：セルゲイ・クリロフ (ヴァイオリン)】

バルトゥリスは、多様な様式と個人的感情を横断する作風で知られる作曲家である。《I like...》シリーズは、過去の作曲家への私的応答として構想された。本作はほとんど無音に近い状態から始まり、独奏ヴァイオリンが長い時間をかけて感情の高まりへと導く。終結部ではシューベルトの弦楽五重奏曲 ハ長調第2楽章の旋律が引用され、美と時間の経験が静かに肯定される。

アルギルダス・マルティナイティス（1950年生）

《楽園の鳥たち》（弦楽オーケストラのための）

マルティナイティスは、自然、信仰、同時代的出来事から着想を得ることで知られる作曲家である。彼の作品は卓越した詩情性と深い感情的影響力を特徴とする。《楽園の鳥たち》は1981年にエレクトリック・チェロと録音のために書かれた初期作品であり、最小限の手法によってネオ・ロマン的感覚を実現している。2016年の弦楽合奏版では、リズムと音色の多彩さが加えられ、聴き手を歓びへと導く音響世界が広がる。

ジブオクレ・マルティナイティエ（1973年生）

《魂の風景》より「春」（チェロと弦楽オーケストラのための）

【独奏：デイヴィダス・ドゥムチウス（チェロ）】

作品タイトル《Sielunmaisema》（2019）はフィンランド語で「魂の風景」を意味する。作曲者によれば、このフィンランド語の語感そのものが着想の源であったという。

本公演では第2楽章「春」が演奏される。この楽章は、生命力と激しい音響体験の交錯において、ヴィヴァルディ《四季》を想起させる。「音楽を通して、聴き手が非日常的な状態に入ることが、私にとって非常に重要である。意識の表層や思考の混沌から、より深い自己認識の次元へと降りていくことが大切なのだ」と作曲者は語っている。独奏チェロは、音響の層の中から浮かび上がる存在として、作品全体の内的時間と感情の推移を導く重要な役割を担っている。